

# パスハ後第六 瞽者の主日 前晩課

2026年5月15日作成  
釧路管轄司祭ステファン内田圭一

司祭) われら <sup>かみ つね あが ほ</sup> 我等の神は恒に崇め讃めらる、<sup>いま いつ よよ</sup> 今も何時も世世に、



司祭) ハリストス<sup>し</sup>死より<sup>ふくかつ</sup>復活し、<sup>し もつ</sup>死を以て死を<sup>ほろぼ</sup>滅し、<sup>はか あ もの いのち たま</sup>墓に在る者に生命を賜えり。

ハリストス<sup>し</sup>死より<sup>ふくかつ</sup>復活し、<sup>し もつ</sup>死を以て死を<sup>ほろぼ</sup>滅し、<sup>はか あ もの いのち たま</sup>墓に在る者に生命を賜えり。

ハリストス<sup>し</sup>死より<sup>ふくかつ</sup>復活し、<sup>し もつ</sup>死を以て死を<sup>ほろぼ</sup>滅し、



【 第103 聖詠 (首誦聖詠：我が靈よ主を讃め揚げよ) 】

わ が た ま し い よ 、 し ゅ を ほ め あ げ よ 。  
我 靈 主 讃 揚

し ゅ よ 、 な ん ぢ は あ が め ほ め ら る 。 し ゅ 主  
主 爾 崇 讃

わ が か み よ 、 な ん ぢ は い た っ て お お い な り 。  
我 神 爾 至 大

し ゅ よ 、 な ん ぢ は あ が め ほ め ら る 。 な ん  
主 爾 崇 讃

ぢ は こ う え い と い げ ん と を こ う む れ り 。  
光 榮 威 嚴 被

し ゅ よ 、 な ん ぢ は あ が め ほ め ら る 。 や ま  
主 爾 崇 讃 山

の いた だ き に み づ た つ み づ た 立  
嶺 水 立 水 立

つ 。 しゅ よ 、 なん ぢ の し わ ざ は き い な  
主 爾 工 業 奇 異

り 。

や ま の あ い だ に み づ な が る 、 み 水  
山 間 水 流 水

づ な が る 。 しゅ よ 、 なん ぢ の し わ ざ は き  
流 主 爾 工 業 奇

い な り 。

み な ち え を も っ て つ く れ り ち え  
皆 智 慧 以 作 智 慧

を も っ て つ く れ り 。

こ う え い は な ん ぢ ば ん ぶ つ を つ く り し しゅ に き  
光 榮 爾 萬 物 作 主 歸

す 。

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も  
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。

何 時 世 世

ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、か み  
神

よ こう え い は なん ぢ に き す 。  
光 榮 爾 歸

ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、か み  
神

よ こう え い は なん ぢ に き す 。  
光 榮 爾 歸

ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、か み  
神

よ こう え い は なん ぢ に き す 。  
光 榮 爾 歸

【 大聯禱 】

司祭) われらあんわ しゅ いの  
我等安和にして主に禱らん、

しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐

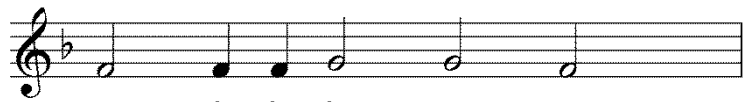
司祭) うえ くだ あんわ われら たましい すくい ため しゅ いの  
上より降る安和と我等が 靈 の 救 の 爲 に 主に 禱らん、

しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐

司祭) ぜんせかい あんわ かみ せい しよきょうかい けんりつ およ しゅうじん ごういつ ため しゅ いの  
全世界の安和、神の聖なる諸 教會の堅立、及び衆 人の合一の爲に主に禱らん、

しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐

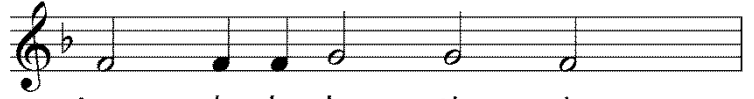
司祭) こ せいどう およ しん つつしみ かみ おそ こころ もつ ここ きた もの ため しゅ いの  
此の聖堂、及び信と 慎 と神を畏るる 心 とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

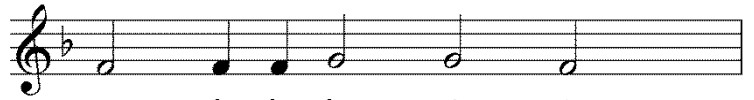
司祭) 教 會 を 司 る 尊 貴 なる 我 等 の 全 日 本 の 府 主 教 セ ラ フ ィ ム 、 司 祭 の 尊 品 、 ハ リ ス

ト ス に 因 る 輔 祭 職 、 悉 く の 教 衆 、 及 び 衆 人 の 爲 に 主 に 禱 ら ん 、



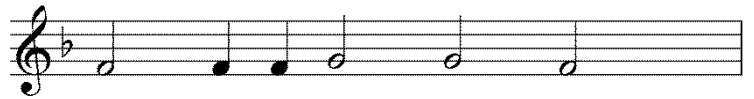
しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) 我 國 の 天 皇 、 及 び 國 を 司 る 者 の 爲 に 主 に 禱 ら ん 、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) 此 の 都 邑 と 凡 の 都 邑 と 地 方 の 爲 、 及 び 信 を 以 て 此 の 中 に 居 る 者 の 爲 に 主 に 禱 ら ん 、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) 氣 候 順 和 、 五 穀 豊 穰 、 天 下 泰 平 の 爲 に 主 に 禱 ら ん 、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) 航 海 する 者 、 旅 行 する 者 、 病 を 患 う る 者 、 艱 難 に 遭 う 者 、 擄 と な り し 者 、 及 び

彼 等 の 救 の 爲 に 主 に 禱 ら ん 、



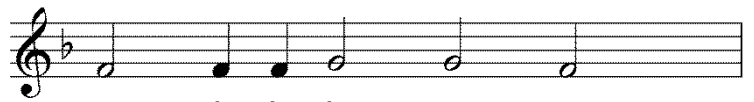
しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) 我 等 諸 の 憂 愁 と 忿 怒 と 危 難 と を 免 る が 爲 に 主 に 禱 ら ん 、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) 神 よ 、 爾 の 恩 寵 を 以 て 、 我 等 を 佑 け 救 い 憐 み 護 れ よ 、

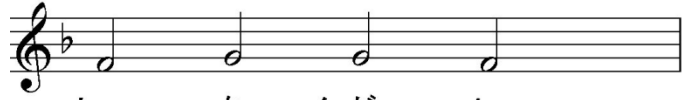


しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>しせいしけつ</sup> 至聖至潔にして <sup>いた</sup> 至りて <sup>さんび</sup> 讚美たる <sup>われら</sup> 我等の <sup>こうえい</sup> 光榮の <sup>ぢよさい</sup> 女宰、<sup>しょうしんぢよ</sup> 生神女、<sup>えいていどうぢよ</sup> 永貞童女マリヤと、

<sup>しよせいじん</sup> 諸聖人を <sup>きおく</sup> 記憶して、<sup>われら</sup> 我等 <sup>おのれ</sup> 己の <sup>みおよ</sup> 身及び <sup>たがい</sup> 互に <sup>おのおの</sup> 各の <sup>み</sup> 身を以て、<sup>もつ</sup> 並に <sup>ならび</sup> 悉く <sup>ことごと</sup> の <sup>われら</sup> 我等の

<sup>いのち</sup> 生命を以て、<sup>もつ</sup> ハリストス <sup>かみ</sup> 神に <sup>いたく</sup> 委託せん、



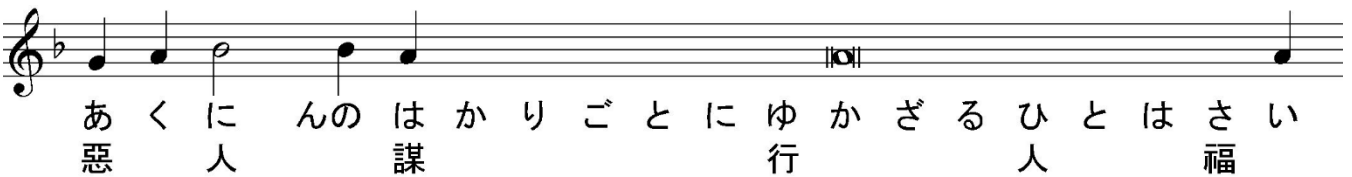
しゅ な んぢ に 。  
主 爾

司祭) <sup>けだし</sup> 蓋、<sup>およ</sup> 凡そ <sup>こうえい</sup> 光榮 <sup>そんきふくはい</sup> 尊貴 <sup>なんぢちち</sup> 伏拜は <sup>こ</sup> 爾 <sup>せいしん</sup> 父と子と聖神に <sup>き</sup> 歸す、<sup>いま</sup> 今も <sup>いつ</sup> 何時も <sup>よよ</sup> 世世に、



ア ミ ン。

【 第一カフィズマ 第一段 】



あくにんのはかりごとゆかざるひとはさい  
悪人 謀 行 人 福



わいなり、ア ril ル イ ヤ、ア ril ル イ



ヤ、ア ril ル イ ヤ。



しゅ は ぎ じ ん の み ち を し る、 あ く に ん の み ち は ほ ろ  
主 義 人 途 知 悪 人 途 滅



び ん、ア ril ル イ ヤ、ア ril ル イ ヤ、ア リ



ル イ ヤ。


  
おそれしゆにつとめよ、おののきてそのまえ
  
畏主勤戦其前


  
によろこべよ、アリルイヤ、アリルイ
  
喜


  
ヤ、アリルイヤ。


  
およそかれをたのむものはさいわいなり、
  
凡彼恃者福


  
アリルイヤ、アリルイヤ、アリル


  
イヤ。


  
しゆやたてよ、わがかみや、われをすくいた給
  
主立吾神我救給


  
まえ、アリルイヤ、アリルイヤ、


  
アリルイヤ。


  
すくいしゆによるなんぢのこうふくはなんぢのた
  
救主依爾降福爾民


  
みにあり、アリルイヤ、アリルイ
  
在


  
ヤ、アリルイヤ。

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も  
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今  
 い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。 ア リ ル イ ヤ 、 ア  
 何 時 世 世  
 リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわ しゅ いの  
 我等復又安和にして主に禱らん、

しゅ あ わ れ め よ 。  
 主 憐

司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも  
 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しゅ あ わ れ め よ 。  
 主 憐

司祭) しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ  
 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら  
 諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのち もつ かみ いたく  
 生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅ な ん ぢ に 。  
 主 爾

司祭) けだしけんべいおよ くに けんとう こうえい なんぢち こ せいしん き いま いつ よよ  
 蓋権柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、

ア ミ ン 。

【 第140聖詠 (主よ爾に籲ぶ) 第5調 】

しゅ よ な ん ぢ に よ ぶ す み や か に わ れ に い た り た 給  
 主 爾 籲 速 我 格 給



ま え 、 しゅよ わ れ に き き た ま え 、 しゅ  
主 我 聽 給 前 主

よ なんぢ に よ ぶ す み や か に わ れ に い た り た ま  
爾 籲 速 我 格 給

え 。 な んぢ に よ ぶ と き わ が い の り の こ え  
爾 籲 時 我 禱 聲

を い れ た ま え 、 しゅよ わ れ に き き た ま  
納 給 主 我 聽 給

え 。 ね が わ く は わ が い の り は こ う  
願 我 禱 香

ろ の か お り の ご と く なんぢ が かんば せ の ま え  
爐 香 如 爾 顔 前

に の ぼ り 、 わ が て を あ ぐ る は くれ の ま  
登 我 手 舉 暮 祭

つ り の ご と く い れ ら れ ん 。 しゅよ わ れ に き  
如 納 主 我 聽

き た ま え 。  
給 前

誦經) しゅ わ くち まもり お わ くちびる もん ふせ たま わ こころ よこしま ことば かが  
主よ、我が口に 衛を置き、我が唇の門を扨ぎ給え、我が心に 邪なる言に傾  
きて、不法を行 う人と共に、罪の推 諉せしむる母れ、願わくは我は彼等の甘味を嘗め  
ざらん。義人は我を罰すべし、是れ 矜 恤 なり、我を譴むべし、是れ極と 美 しき 膏、我  
が 首 を悩ます能わざる者なり、唯我が 禱 は彼等の 惡事に敵す。彼等の 首 長 は巖石の  
間 に散じ、我が 言 の 柔 和なるを聽く。我等を土の如く 斫り 碎き、我が 骨 は地獄の口  
に散りて 落つ。主よ、主よ、唯我が目は 爾 を仰ぎ、我 爾 を恃む、我が 靈 を 退 くる

なか わ ため もう わな ふほうしゃ あみ われ まも たま ふけんしゃ おのれ あみ かか  
母れ。我が爲に設けられし弥、不法者の網より我を護り給え。不虔者は己の網に罹  
り、唯我は過ぐるを得ん。

【 第141聖詠 】

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい  
我が聲を以て主に呼び、我が聲を以て主に禱り、我が禱を其前に注ぎ、我が憂を  
そのまえ あらわ わ たましい うち よわ とし なんぢ われ みち し わ ゆ みち おい  
其前に顯せり。我が靈の衷に弱りし時、爾は私の途を知れり、我が行く路に於て、  
かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと もの われ  
彼等は竊に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我  
のが ところ わ たましい かえりみ もの しゅ われなんぢ よ い なんぢ われ  
に通る所なく、我が靈を顧る者なし。主よ、我爾に呼びて云えり、爾は私の  
かくれが い もの ち おい われ ぶん わ よ き たま われはなはだよわ  
避所なり、生ける者の地において私の分なり。我が呼ぶを聞き給え、我甚弱りたれば  
なり、我を迫害する者より救い給え、彼等は我より強ければなり。

句⑨ なんぢおん われ たま とし きじん われ めぐ  
爾恩を我に賜わん時、義人は我を環らん。

讃詞⑨ なんぢ とうと じゅうじか あくま はづか ふくかつ つみ はり にぶ  
ハリストスよ、爾は尊き十字架にて悪魔を辱しめ、復活にて罪の蝥刺を鈍くし、  
われら し もん すく たま どくせいし われらなんぢ さんえい  
我等を死の門より救い給えり、獨生子よ、我等爾を讚榮す。

句⑧ しゅ われふか ところ なんぢ よ しゅ わ こえ き たま  
主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聞き給え、

讃詞⑧ じんるい ふくかつ たま しゅ ひつじ ごと ほふり ため ひ じごく きみ これ おそ  
人類に、復活を賜う主は羊の如く屠宰の爲に牽かれたり、地獄の君は之を畏れ、  
かなしみ もん あ けだしこうえい おう い なわめ あ もの い くら  
悲の門は擧げられたり、蓋光榮の王ハリストスは入りて、縛に在る者に出でよ、幽  
やみ あ もの あらわ い  
暗に在る者に顯れよと言えり。

句⑦ ねが なんぢ みみ わ いのり こえ き い  
願わくは爾の耳は我が禱の聲を聞き納れん。

讃詞⑦ おおい きせき み もの ぞうせいしゅ ひと あい よ み くるしみ う ふ  
大なる奇跡や、見えざる者の造成主は、人を愛するに因りて、身にて苦を受け、不  
し もの ふくかつ しょみんしよぞくきた これ ふくはい けだしそのめぐみ よ われら まよい  
死の者は復活せり、諸民諸族來りて、之に伏拜せん、蓋其恵に因りて、我等は迷  
のが さんい ゆいいち かみ うた なら  
より脱れて、三位にして唯一なる神を歌うを習えり。

句⑥ しゅ も なんぢふほう ただ しゅ だれ よ た しか なんぢ ゆるし ひと  
主よ、若し爾不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の  
なんぢ まえ つつし ため  
爾の前に敬まん爲なり。

讃詞⑥ われらくれ ふくはい なんぢく ひかり たてまつ なんぢ よ すえ かがみ お ごと み  
我等暮の伏拜を爾暮れざる光に奉る、爾は世の季に、鏡に於けるが如く身に  
よ せかい かがや ちごく くだ かしこ くらやみ やぶ ふくかつ ひかり しょみん  
藉りて世界に耀き、地獄にまで降り、彼處にある幽暗を破り、復活の光を諸民に

あらわ たま ひかり ほどこ しゅ こうえい なんぢ き  
顯し給えり、光を施す主よ、光榮は爾に歸す。

句⑤ われしゅ のぞ わ たましいしゅ のぞ われかれ ことば たの  
我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。

讃詞⑤ われら わ すくい かしら さんしょう けだしかれし ふくかつ せかい まよい  
我等はハリストス我が救の首を讃頌す、蓋彼死より復活せしに、世界は迷よ  
り救われたり、天使の軍は歡び、惡魔の迷は去り、墜ちたるアダムは起き、ディアボル  
は空しくせられたり。

句④ わ たましいしゅ ま ばんにん あさ ま ばんにん あさ ま はなはだ  
我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

讃詞④ ばんべい ふほう もの おし ふくかつ かく ぎん う い われら  
番兵は不法の者より教えられたり、ハリストスの復活を匿せ、銀を受けて云え、我等  
が寝ねたる時、死者は墓より竊まれたりと、誰か之を見たる、誰か何時か死者の竊まれ  
しを聞きたる、況や其香料を傳られ、裸體になり、斂葬の衣を墓に遺したるをや、  
イウデヤ人よ、惑う毋れ、諸預言者の言を學びて、彼が實に世界の贖罪者及び  
全能者なるを悟れ。

句③ ねが しゅ たの けだしあわれみ しゅ おおい あがない かれ  
願わくはイズライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、  
かれ  
彼はイズライリを其悉くの不法より贖わん。

讃詞③ ちごく とりこ し ほろぼ しゅ とうと じゅうじか せかい たら わ きゅうせいしゅ  
地獄を虜にし、死を滅しし主、尊き十字架にて世界を照しし我が救世主よ、  
われら あわれ たま  
我等を憐み給え。

句② ばんみん しゅ ほ あ ばんぞく かれ あが ほ  
萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ、

讃詞② こしゃ うま もの おのれ おもい い あにわれ おや つみ よ めしい うま  
警者にして生れし者は己の念に言えり、豈我は親の罪に因りて警にして生れし  
か、豈我は諸民の不信の爲に其責を負いて生れしか、何時か夜、何時か晝と問うを須  
いず、我が足は石に躓くを免れず、我日の光をも、我を造りし者の像をも見ざりき、  
ハリストス神よ、爾に祈る、我を顧みて我を憐み給え。

句① けだしかれ われら ほどこ あわれみ おおい しゅ しんじつ なが そん  
蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

讃詞① でん い す とき うまれ めしい ひと あ これ あわれ だろ その  
イイスス殿より出でて過ぐる時、生ながら警なる人に遇い、之を憫みて、泥を其  
め お い ゆ あら かれあら み え こうえい かみ き そのとなり  
目に置きて云えり、往きてシロアムに洗え、彼洗いて見るを得て、光榮を神に歸せり。其隣  
の人は彼に謂えり、爾の目は見る者の中孰も醫す能わざりしに、孰か之を啓きたる、

かれよ い とな ひと こ ひとわれ い あら すなわちみ  
 彼呼びて云えり、イイスと稱うる人、斯の人我に謂えり、シロアムに洗えと、乃見る  
 え かれ じつ りつぼう い ところ かれ われら  
 を得たり。彼は實にモイセイが律法に言いし所のハリストスメシヤなり、彼は我等の  
 たましい きゅうしゃ  
 靈の救者なり。

こうえい ちち こ せいしん き  
 光榮は父と子と聖神に歸す、

しゅ なんぢみち す とき うまれ めしい ひと あ もんとあや なんぢ と  
 主よ、爾途を過ぐる時、生ながら警なる人に遇えり、門徒異しみて、爾に問いて  
 い ふうし こ ひと めしい うま こ だれ つみ え かれ そもそもそのおや  
 云えり、夫子よ、斯の人の警にして生れしは、是れ孰か罪を獲たる、彼か、抑其親  
 なんぢわ きゅうせいしゅ かれら よ かれ つみ え そのおや またしか すなわちかれ おい  
 か、爾我が救世主よ、彼等呼べり、彼も罪を獲ず、其親も亦然り、乃彼に於て  
 かみ わざ あらわ ため われ われ つかわ もの わざ だれ な あた もの な  
 神の作爲の顯れん爲なり。我は我を遣しし者の作爲、誰も爲す能わざる者を爲すべし。

これ い ち つばき どころ な めしい め め これ い ゆ いけ  
 之を言いて、地に唾して、泥を成し、警者の目に塗りて、之に謂えり、往きて、シロアムの池  
 あら かれあら い え なんぢ よ しゅ われしん すなわちなんぢ ふくはい ゆえ  
 に洗え。彼洗ひて愈ゆるを得て、爾に呼べり、主よ、我信ず、乃爾に伏拜せり。故に  
 われら よ われら あわれ たま  
 我等も呼ぶ、我等を憐み給え。

いま も い つ も よ よ に、アミン。  
 今 も 何 時 も 世 世 に、アミン。

むか しくれないのうみにてこんいんをしら  
 昔 紅 海 婚姻 知

ざるよめのかたちしるされたり。かしこ  
 聘女 象 記 彼 處

にはモイセイみづをわか つもの、ここには  
 水 分 者 此 處

ガヴリル 奇 迹 せ 務 につとむるものなり。かのと  
 奇 迹 務 者 彼 時

きばらひはあしをぬらさずしてふかみをあゆ  
 足 濡 深 處 歩

み、いま どうて いぢよは たねなくして ハリスト  
 今 童 貞 女 種

を うめ り。 うみ は けうりの わたりし のち  
 生 海 渉 後

もとの まま と おられ ず、 きず なき もの は  
 元 過 玷 者

イマヌエル を うみし のち もとの まま きず な し。  
 生 後 元 玷

え いえんに して いと え いえん な る もの、 ひと  
 永 遠 最 永 遠 者 人

となりて あらわれし か みよ、 われら を あ  
 現 神 我 等 憐

われ みたま え。  
 給

司祭) えいち つし た  
 睿智、 肅みて立て、

【 聖ソフロニウスの祝文 】

せ い に して ふ く た る じょう せ い な る てん の ち ち の  
 聖 福 常 生 天 父

せ い な る こう え い の お だ や か な る ひ か り イ イ  
 聖 光 榮 の 穩 光

ス ハリスト スよ、 われら ひの いりに いたり く  
 我 等 日 入 至 暮

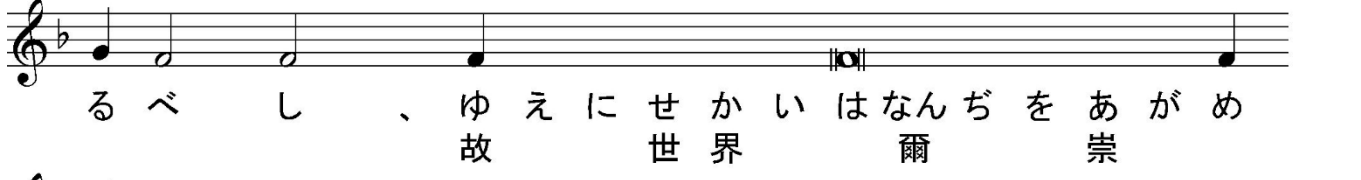
れの ひか り を み て、 か み ち ち と こ と せ い しん  
 光 見 神 父 子 聖 神



をうた う。いのちをたもうかみのこ  
歌 生 命 賜 神 子



よ、なんぢはいつもけいけんのこえにてうたわ  
爾 何 時 敬 虔 聲 歌



るべし、ゆえにせかいはなんぢをあがめ  
故 世 界 爾 崇



ほむ。  
讚

【 プロキメン スポタ 提綱 土曜日の 第6調 】

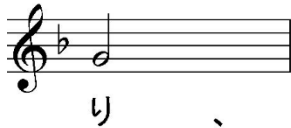
司祭) <sup>つつし</sup>謹 <sup>き</sup>みて聴くべし、

司祭) <sup>しゅうじん</sup>衆 <sup>へいあん</sup>人に平安。<sup>えいち</sup>睿智、

司祭) <sup>だいろく</sup>プロキメン、<sup>しらべ</sup>第六の調、<sup>しゅ</sup>主は王たり、<sup>おう</sup>、<sup>かれ</sup>彼は威嚴<sup>いげん</sup>を衣<sup>き</sup>たり、



しゅはおうたり、かれはいげんをきた  
主 王 彼 威 嚴 衣

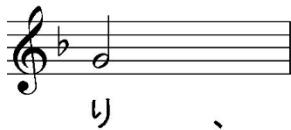


り、

司祭) <sup>しゅ</sup>主は能<sup>のうりよく</sup>力を衣<sup>き</sup>、又<sup>また</sup>之<sup>これ</sup>を帯<sup>おび</sup>にせり、



しゅはおうたり、かれはいげんをきた  
主 王 彼 威 嚴 衣



り、

司祭) <sup>ゆえ</sup>故に世界<sup>せかい</sup>は堅固<sup>けんご</sup>にして動<sup>うご</sup>かざらん、

しゅはおうた り、かれはいげんをきた  
主 王 彼 威 嚴 衣

り、

司祭) しゅ せいとく なんぢ いえ ぞく えいえん いた  
主よ、聖徳は爾の家に屬して永遠に至らん、

しゅはおうた り、かれはいげんをきた  
主 王 彼 威 嚴 衣

り、

司祭) しゅ おう  
主は王たり、

かれはいげんをきた り。  
彼 威 嚴 衣

【 重聯禱 】

司祭) かみ なんぢ おおい あわれみ よ われら あわれ なんぢ いの き い あわれ  
神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またわがくに てんのうおよ くに つかさど もの たため いの  
又我國の天皇及び國を司る者の爲に禱る、

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ。  
主 憐 主 憐 主 憐

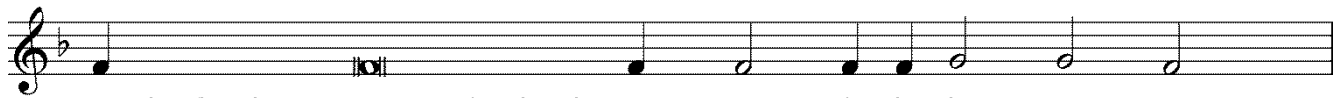
司祭) またきょうかい つかさど そんき われら ぜんにつぼん ふしゅきょう およ お  
又教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、及びハリストスに於

ける ことごと われら けいてい たため いの  
ける 悉くの我等の兄弟の爲に禱る、

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またつね きおく ふく こ せいどう こんりつしゃ およ すで ねむ ことごと ふ そけいてい  
又恒に記憶せらるる福たる此の聖堂の建立者、及び既に寝りし 悉くの父祖兄弟、

こ ところ しょほう ほうむ せいきょう もの ため いの  
此の處と諸方とに葬られたる正教の者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またかみ しょぼくこ せいどう けいてい じれん せいめい へいあん そうけん きゅうしょく けんこ かんゆう  
又神の諸僕此の聖堂の兄弟に、慈憐、生命、平安、壮健、救贖、眷顧、寛宥、

および諸罪の赦を賜わんが爲に禱る、

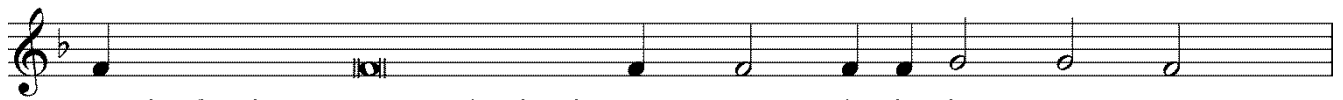


しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

( ※ 特別な災害や特別な感謝がある時、重聯禱にその旨追加する場合があります。その場合も「主憐め、主憐め、主憐めよ。」と応えて歌う。 )

司祭) またこ せいどう もの たてまつ ぜんぎょう おこな これ ろう これ うた およ ここ た  
又此の聖堂に物を獻り、善業を行い、之に勞し、之に歌い、及び此に立ちて

爾の大にして豊なる憐を仰ぎ望む者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) けだしなんぢ じれん ひと あい しみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま  
蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今

も何時も世々に、



ア ミ ン。

誦經) しゅ われら まも つみ こ くれ わた たま しゅわ せんそ かみ なんぢ あが ほ  
主よ、我等を守り罪なくして此の晩を度らせ給え、主吾が先祖の神よ、爾は崇め讚

められ 爾の名は世々に 尊み歌わる、アミン。

しゅ なんぢ たの よ なんぢ あわれみ われら た たま しゅ なんぢ あが ほ  
主よ、爾を恃むに因りて、爾の憐を我等に垂れ給え、主よ、爾は崇め讚めらる、

なんぢ いましめ われ おし たま しゅさい なんぢ あがめほ なんぢ いましめ われ さと たま  
爾の誠を我に訓え給え、主宰よ、爾は崇讚めらる、爾の誠を我に悟らせ給

え、聖なる者よ、爾は崇讚めらる、爾の誠にて我を照し給え。

しゅ なんぢ あわれみ よよ あ なんぢ て つく もの す なか ほまれ なんぢ き  
主よ、爾の憐は世々に在り、爾の手の造りし物を棄つる勿れ、讚は爾に歸し、

うた なんぢ き こうえい なんぢち こ せいしん き いま いつ よよ  
歌は 爾に歸し、光榮は 爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

【 増聯禱 】

司祭) われらしゅ まえ わ くれ いのり ま ぐわ  
我等主の前に吾が晩の禱を増し加えん、



司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも  
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) こ くれ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと  
此の晩の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、



司祭) へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしや たま しゅ もと  
平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む、



司祭) われら つみ あやまち なだ ゆる しゅ もと  
我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、



司祭) われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと  
我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、

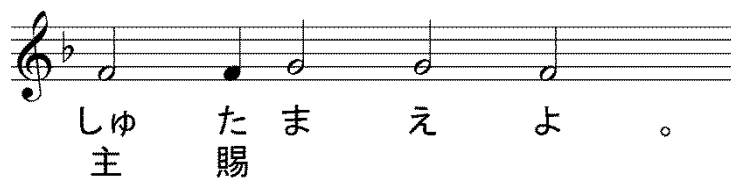


司祭) われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと  
我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



司祭) われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ  
我等の生命の終がハリスティアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及びい

リストスの畏る可き審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、

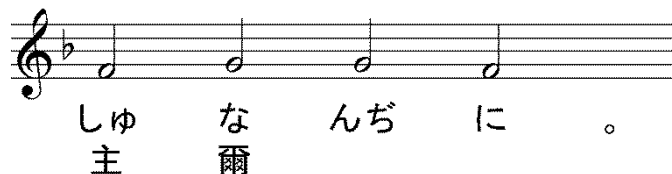


しゅ たま え よ 。  
主 賜

司祭) 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのちもつ、ハリストス神に委託せん、



しゅ な ん ぢ に 。  
主 爾

司祭) 蓋爾は善にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も

何時も世に、



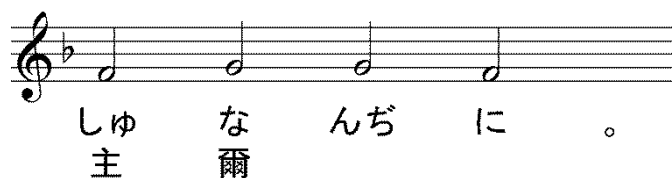
ア ミ ン。

司祭) 衆人に平安



なんぢのしんにも。  
爾 神

司祭) 我等の首を主に屈めん



しゅ な ん ぢ に 。  
主 爾

司祭) (黙經 主我が神、天を屈めて人類を救うが爲に降りし者よ、爾の諸僕と爾の嗣

業とを顧み給え、蓋爾の諸僕は、爾畏るべくして人を愛する審判者に

首を屈め、己の頸を伏し、人の助を俟たず、乃爾の憐を俟ち、爾の

救を仰ぐ、求む彼等を恒に護り、彼等を此の夕にも、次て至る夜にも、凡の

敵凡の悪魔の姦謀と虚しき思慮と悪しき意念とより護り給え、)

ねが 願わくは 爾 父と子と聖 神の國の權柄は讚揚讚榮せられん、  
なんぢちち こ せいしん くに けんぺい さんようさんえい いま いつ よよ



【 挿句讚頌 第5調 】

誦經) 爾、身を取りたれども、天を離れざりし救世主ハリストスを歌の聲を以て讚め揚ぐ  
なんぢ み と てん はな きゆうせいしゆ うた こえ もつ ほ あ  
 る、蓋 爾は人を愛する主なるによりて、我が族の爲に十字架と死とを受けて、地獄の  
けだしなんぢ ひと あい しゆ わ やから ため じゅうじか し う ぢごく  
 門を破り、三日目に復活して、我等の靈を救い給えり。  
もん やぶ みっかめ ふくかつ われら たましい すく たま

【 パスハ讚頌 第5調 】

か み は お き 、 そ の あ だ は ち る べ  
 神 興 其 仇 散  
 し 。

せ い な る パ スハ い ま や わ れ ら に あ ら わ  
 聖 今 我 等 現

れ り 、 あ ら た な る パ スハ 、 ひ 秘  
新

み つ の パ スハ 、 い と と う と き パ スハ 、  
 密 至 尊

パ スハ リ ス ト スキ ユ う せ い し ユ 、 き ず な き  
救 世 主 瑕

パ スハ 、 お お い な る パ スハ 、 し ん じ ゃ の  
大 信 者

パスハ、てんごくのもんをわれらにひらくの  
 天國 門 我等 啓

パスハ、すべてのしんじゃをせいにするの  
 凡 信者 聖

パスハな り。

けむりのちるがごとく、ふきはらわ  
 煙 散 如 吹 払

るべし。

さいわいをしらせるおんなどもや、  
 福 報 女 達

ことをみてきたりツバにいうべし、  
 事 観 來 言

ハストスのふくかつのよろこばしきしらせ  
 復 活 喜 報

をわれらよりうけよと、イエルサリム  
 我 等 受

やハストおうはなむこのごとくはかより  
 王 新 郎 如 墓

いづるをみて、よろこび、いわい、た樂  
 出 見 喜 祝 樂

のしめよ。

あくにんかみのまえにほろび、ただぎじん  
悪人神の前亡、惟義人

たのしむべし。

あぶらをたづさうるおんなどもあさはやく  
香膏を携る女達あ朝早

いのちをたもうものはかにきたり、い石  
生命を賜うものは墓に來り、い石

しにぎするかみのつかいにあう、かれ  
坐する神の使に會う、かれ

にいえるは、なんぞいけるものをしせしもの  
言えるは、なんぞ生けるものを死しもの

のうちにたづぬるや、なんぞくちぎるも者  
中に尋るや、なんぞ朽ちるも者

のをくちるとしてかなしみなくや、  
朽ちるとして哀しみなくや、

ゆいてそのもんとにふくかつをつたえよ。  
往いて其門徒復活を傳えよ。

しゅはこのひをつくれり、これをいわいてたの  
主此日作之を祝はる

しむべし。

たのしきパスハ、パスハしゅのパスハ、あ崇  
樂しきパスハ、パスハしゅの主、あ崇

がむべきパ スハ 、 われらにあらわれり、  
 我 等 現  
 パ スハ に よ っ て われら と も に よ ろ こ び  
 因 我 等 借 喜  
 た が い の あ い を あ ら わ す べ し 、 う れ い よ  
 互 愛 顯 憂 患  
 り の す く い な る か な パ ス ハ や 、 ハ リ ス ト ミ ヤ  
 拯 宮  
 よ り い づ る が ご と く は か よ り ひ か り  
 出 如 墓 光  
 い で 、 お ん な を よ ろ こ び に み て て  
 出 女 欣 喜 満  
 い う 、 し と ど も に つ た え よ と 。  
 云 使 徒 達 傳

誦經) こうえい ちち こ せいしん き  
 光 榮 は 父 と 子 と 聖 神 に 歸 す、

ぎ むけい ひ かみ うまれ めい うしな もの れいたい め なんぢ し  
 義 の 無 形 の 日 た る ハ リ ス ト ス 神 、 生 な が ら 明 を 失 い た る 者 の 靈 體 の 目 を 爾 の 至  
 じょう さわり ひら われら たましい め かがや しゅ われら ひ しょし あらわ たま  
 淨 な る 捫 に て 啓 き 、 我 等 の 靈 の 目 を も 耀 か し し 主 よ 、 我 等 を 日 の 諸 子 と 顯 し 給  
 われらしん もつ なんぢ よ ため なんぢ われら お じれん おおい い がた ひと  
 え 、 我 等 信 を 以 て 爾 に 呼 ば ん 爲 な り 、 爾 が 我 等 に 於 け る 慈 憐 は 大 に し て 言 い 難 し 、 人  
 あい しゅ こうえい なんぢ き  
 を 愛 す る 主 よ 、 光 榮 は 爾 に 歸 す。

い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
 今 何 時 世 世  
 ふ く か つ の ひ 、 わ れ ら を て ら せ り 、  
 復 活 の 日 我 等 照

い わ い て た が い に あ い い だ く べ し 、 わ れ  
 祝 慶 互 相 抱 我  
 ら を に く む も の に も ま た い う べ し 、  
 等 嫉 者 又 日  
 き よ う だ い や 、 ふ く か つ に よ り て み な た が  
 兄 弟 復 活 縁 皆 互  
 い に ゆ る し て 、 あ い と も に か く う た  
 恕 相 借 斯 歌  
 わ ん。

ハ ス ト ス し よ り ふ く か つ し 、 し を も っ て し を  
 死 復 活 死 以 死  
 ほ ろ ぼ し 、 は か に あ る も の に  
 滅 墓 在 者  
 い の ち を た ま え り 。  
 生 命 賜

誦經) しゅさい いまなんぢ ことば したが なんぢ ぼく ゆる あんぜん ゆ けだしわ め  
 主宰よ、今爾の言に循いて、爾の僕を釈し、安然として逝かしむ。蓋我が目

なんぢ すくい み なんぢ ばんみん まえ そな もの こ いほうじん たら ひかり およ  
 は爾の救を見たり。爾が萬民の前に備えし者なり、是れ異邦人を照すの光、及

なんぢ たみ さかえ  
 び爾の民イスライリの榮なり。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ せい かみ せい ゆう  
 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。聖なる神、聖なる勇

き せい じょうせい もの われら あわれ せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの  
 毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者

われら あわれ  
 よ、我等を憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。アミン。

しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎよ しゅさい われら あやまち  
 至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を

ゆる せい もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よ。  
赦せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ  
主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。アミン。

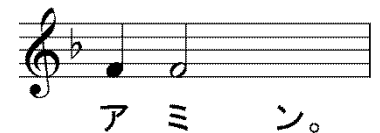
てん いま われら ちち ねがわく なんぢ な せい なんぢ くに きた なんぢ むね てん  
天に在す我等の父よ、願は爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天

おこな ごと ち おこな わ にちよう かつて こんにちわれら あた たま われら  
に行わるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に

おいめ もの われらゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いざない みちび なおわれ  
債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我

ら きようあく すく たま  
等を凶惡より救い給え。

司祭) けだしくに けんとう こうえい なんぢち こ せいしん き いま いつ よよ  
蓋國と権能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。



【 主日の發放讃詞 第5調 】

しんじやよ、ちちとせいしんとともにはじめ  
信者父聖神共に始  
なきことばわがすくいのため  
言吾救爲  
どうていぢよよりうまれしものをほめうたいて  
童貞女生者讃歌  
おがむべし、かれあまんじてそのみにて  
拜彼甘其身  
じゅうじかにのぼり、しをしのび、そ  
十字架の上死忍其  
のこうえいのふくかつにてしせしもの  
光榮復活死生者

を ふ く か つ せ し め た ま い し に よ る 。  
 復 活 給

【 生神女讃詞 第5調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い 今  
 光 榮 父 子 聖 神 歸

ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
 何 時 世 世

と お ら れ ぬ し ゅ の も ん よ 、 よ ろ こ べ 、 な ん ぢ に  
 通 主 門 慶 爾

は し り つ く も の の か き と お お い よ 、 よ ろ こ  
 趨 附 者 の 垣 塙 慶

べ 、 お だ や か な る み な と よ 、 こ ん い ん を し  
 穩 湊 婚 姻 識

ら ず し て 、 み に て な ん ぢ の ぞ う せ い し ゅ お よ  
 身 爾 造 成 主 及

び か み を う み し も の よ 、 よ ろ こ べ 。  
 神 生 者 慶

な ん ぢ の さ ん を ほ め う た い て お が む も の の た め  
 爾 産 讃 歌 拜 者 の た め

に や め ず し て い の り た ま え 。  
 息 給

司祭) <sup>かみわれら たのみ</sup> ハリストス神我等の <sup>こうえい なんち き</sup> 特よ、<sup>こうえい なんち き</sup> 光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も  
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今



いつもよよに、アミン。しゅあわれめ、しゅ主  
何時 世世 主 憐 主



あわれめ、しゅあわれめよ、ふくをくだ  
憐 主 憐 福 降



せ。

司祭) <sup>し ふくかつ し もつ し ほろぼ はか あ もの いのち たま われら まこと</sup> 死より復活し、死を以て死を滅し、墓に在る者に生命を賜いしハリストス我等の眞の

<sup>かみ そのしじょう はは せい ぎ かみ そふぼ</sup> 神は、其至浄なる母…、( 某 )、聖にして義なる神の祖父母イオアキム

<sup>およ およ しょせいじん きとう より われら あわれ すく かれ ぜん ひと あい</sup> 及びアンナ、及び諸聖人の祈禱に因て我等を憐み救わん、彼は善にして人を愛する

<sup>しゅ</sup> 主なればなり、



アミン。



かみよ、わがくにのてんの う、および  
神 我 國 天皇 及



くにをつかさどるもの、われらのふしゅ  
國 司 者 我 等 府 主



きょうセラフィム、およびことごとくのせいきょう  
教 及 悉 正 教



のハステアンら を、いくとせにもまもり  
等 を 幾 歳 護



たまえ。